

ブロニスワフ・ピウスツキ資料を求めて

沢田 和彦

2015年3月に筆者はポーランドのクラクフとザコパネを訪問し、クラクフではポーランド芸術アカデミー・科学アカデミー(PAU i PAN)学術図書館、ポーランド科学アカデミー・芸術アカデミー(PAN i PAU)学術文書館、クラクフ国立文書館、ヤギエヴォ図書館でブロニスワフ・ピウスツキ関係の資料を調査・収集した。

学術図書館の特殊コレクション中に大量のピウスツキ関係資料が保管されている。ピウスツキ資料は全部で23の整理番号(スィグナトゥラ)から成っており、そのうち彼が1892～96年にサハリンで撮影・収集したアルバム中の写真190葉は芸術アカデミー(PAUart)のHPで見ることができる¹⁾。

PAN i PAU 学術文書館には、ピウスツキ関係資料は全部で20整理番号あった。書簡類が中心で、特にピウスツキ宛とマリア・ジャルノフスカ宛の書簡が大量にあった。マリアはピウスツキの幼なじみの人妻で、彼が1906年10月にクラクフに到着した後に一時期同棲した女性である。ここで発見した写真を1葉紹介する=写真(1)=。写真の下方には被写体各人の姓名がロシア語で記されている。裏面にはポーランド語で「子供たちとの交流、サハリン、1901-1904」と記入されている。後列中央がピウスツキである。



(1)

クラクフ国立文書館にはピウスツキ関係資料はわずかしかなかったが、彼がサハリンと日本で入手した、日本人、ポーランド人、中国人、アメリカ人の写真14葉と絵葉書3枚は、筆者にとって貴重な発見となった。そのうち2葉=写真(2)、(3)=を紹介する。これらは他の写真とともにクラクフ国立文書館のHPで公開されている²⁾。



(2)



(3)

これらは被写体と光の量が違うので異なる日時に撮影したのだろうが、部屋は同じである。写真(2)の左背後に薬缶、写真(3)の右背後には目覚し時計という生活用品が写っている。またいずれの写真でも和室に椅子が置いてあることからして、これは「箱館屋」の2階の可能性が高い。もしそうだとすれば、これらはきわめて貴重な写真である。

ピウスツキは1905(明治38)年12月に来日し、翌年1月中旬から7月初旬まで東京市京橋区尾張町2丁目9番地の「箱館屋」という、富士の看板を掲げた商店の2階に滞在した。「箱館屋」の主人は信大蔵(しんたいぞう)という人物。もと尾張藩江戸詰の武士で、榎本武揚に従って五稜郭の戦いに参加し、銃弾を6発受けて江戸へ護送されてきた敗残兵の前歴を持つ。その後プロテスタント信者となり、1874年に銀座に来て、榎本の援助のもとに函館の天然氷や牛乳を買い、宮内省御用として知られ、後にはアイスクリームや洋酒類も置いて、スタンドバーの元祖として銀座の名物のひとつとなった。与謝野鉄幹に「箱館屋」という1907年の長詩がある。この店はウラジオストク方面のロシア人と取引があり、旧幕臣や1884年に日本に亡命した朝鮮の亡命政治家金玉均、外国の水兵などがたむろしていたという。写真(2)、(3)に写っている日本人男女

は、現時点では特定できない。

広大な建物を誇るヤギエヴォ図書館は、現在は大学附属図書館となっている。ヤギエヴォ大学は1364年に創立された名門大学で、古くはコペルニクスから、近年はローマ教皇ヨハネ・パウロ二世、作家スタニスワフ・レム、ノーベル賞詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカなどが輩出した。本図書館にはピウスツキのポーランド語書簡 49 通とピウスツキ宛のポーランド語書簡 2 通が所蔵されている。

週末はクラクフの図書館と文書館が閉館になるので、南の山岳リゾート地ザコパネへ一泊で出かけた。ザコパネはピウスツキがその後クラクフから移り住み、マリア・ジャルノフスカと一緒に暮らしたゆかりの地である。当地のトラ博物館もピウスツキと関わりが深く、彼宛の書簡を所蔵している。

2015 年秋には筆者はワルシャワの近現代文書館を訪問した。ここにもピウスツキ関係文書が全部で 134 整理番号あり、内訳は書簡 116、メモ 2、写真 14、名刺 1、絵葉書 1 である。またピウスツキ関係文書とは別に、「パリ・ポーランド国民委員会」文書と「ボレスワフ・シュチェシニャク・コレクション」にもピウスツキに関わる貴重な資料が含まれていた。

ボレスワフ・シュチェシニャク(1908-96)はポーランドの日本研究者で、1937~42年にポーランド外務省条約局契約職員として東京のポーランド大使館に勤務した。その間、1939~42年に留学生として早稲田大学で古代日本の研究に従事し、1939年5月から1942年3月まで立教大学で本邦初の正式な講座でポーランド語とポーランド文学を教えた。第二次大戦後アメリカに渡り、インディアナ州にあるノートルダム大学の教授となった³⁾。

シュチェシニャクは来日に際して本国政府から指令を受けていたのだろう、当時まだ存命の世界中のピウスツキ関係者に照会状を送り、それに対する回答文書が「シュチェシニャク・コレクション」に残っている。そのなかに筆者は、ピウスツキとアイヌ女性チュフサンマの間に生まれた長男木村助造のシュチェシニャク宛封筒と日本語書簡(1939年10月18日付)を発見したので、全文紹介する。

「拝復 御手紙下さいまして誠に有り難う御座います 日本に來られて親善関係に努力されて居られる事を衷心敬意を表します 私の父は波蘭の御國の人であった事は承知してありますが私が三四歳の幼時でありましたので何事も知って居りません 随って妹キヨさんも母の胎内中であって何等父の生存中の事などわかる筈がないのです。一番善く知って居た木村愛助と言ふ人が今生きて居れば五十歳以上になりますが あとの人は別段に

わからないのです 甚だ残念ですがあなたの本を書く上に何か参考になる事をお知らせする事が出来ないのでお気の毒です 只私の母のジユウサンマは昭和十二年一月十八日に死去してあります。あなたの御手紙にはシンキンチョウと書いてありますが違ひます 尚寫眞は今撮ったもので差上げる様なものはありませんので後日送り上げます 最後に貴方の御健康とお國の再興をお祈りして止みません 昭和十四年十月十八日 樺太白濱 木村助蔵 ボレスラフシチェスニャク様 机下」

書簡中の「木村愛助」は、ピウスツキがサハリンで冬場に開いた識字学校のアイヌ人生徒である。「私の母のジユウサンマは昭和十二年一月十八日に死去してあります。あなたの御手紙にはシンキンチョウと書いてありますが違ひます」という個所は重要である。従来の説ではチュフサンマは昭和 11(1936)年 1 月に死去したとされていたが、助造の言う昭和 12 年 1 月が正しいと考えるべきだろう。また能仲(のなか)文夫『北蝦夷秘聞 樺太アイヌの足跡』(北進堂書店、1933)のなかでチュフサンマは「シンキンチョウ」と呼ばれているが、助造がこれを明確に否定していることも注目すべきである。

一点気になるのは、封筒の裏面と書簡の末尾に「助造」ではなく「助蔵」と記されていることだ。おそらくこの書簡は他人の代筆によるもので、それ故の誤記かと思われる。この書簡の英語訳も「シュチェシニャク・コレクション」中に見つかった。

以上の調査旅行と新発見資料について詳しくは、拙稿「ブロニスワフ・ピウスツキ関係新発見資料について」を参照されたい⁴⁾。

注 ¹⁾<http://www.pauart.pl/app>

²⁾<http://www.ank.gov.pl/wystawy-i-galerie/japonskie-szlaki-bronislawa-pilsudskiego>

³⁾ 井上紘一、佐佐木信綱と W・シエロシエフスキの「愛国」の友情、POLE 90, 2017.1
<http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE90Sieroszewski.pdf>

⁴⁾ 埼玉大学紀要 教養学部 52-2, 2017.3
http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/download.php/KY-AA12017560-5202-09.pdf?file_id=36133

さわだ・かずひこ 大阪府生まれ、大阪外国語大学卒業、早稲田大学大学院修了、博士(文学)。埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授。著書に『白系ロシア人と日本文化』『日露交流都市物語』(ともに成文社)など。

